日本総研
The Japan Research Institute, Limited

日印経済安全保障研究会

インド外交の展開

第二回日印経済安全保障研究会ではインド外交の展開について、伊豆山真理 防衛研究所 理論研究部長にご講義いただきました。伊豆山部長と平松賢司理事長との対談を行いました。

（平松）第２回日印安全保障研究会では、伊豆山真理防衛研究所　理論研究部長にお越しいただき、モディ政権下におけるインド外交の展開についてプレゼンテーションをしていただきました。

今、インドは世界中から注目を集めており、様々な国がインドとの外交を強化しています。元々インドは戦略的自立という観点から色々な国と良好な関係を築いてきましたが、近年はインドの外交戦略が根本的に変わってきているとの見方もあります。最近、特に注目を浴びましたが、今年６月のモディ首相の訪米時において技術・防衛面での具体的な成果があったように、インドは米国との関係をより重視しているとも考えられます。この点も踏まえ、現在のインド外交は根本的に性格が変化したと考えるべきか、あるいは基本的に今までの延長線上として捉えるべきか、について先生はどうお考えでしょうか？

（伊豆山）インドがアメリカとの戦略的パートナーシップに期待するものとしては、自らの台頭を承認してくれること、少なくとも中国並みの大国として処遇してもらう、という点があります。更にもう一つは、技術・防衛装備面において米国がインドの能力を高めてくれる、ということに期待しています。第一の点については過去２０年間における印米関係の進展によりある程度の成果が得られましたが、第二の点である技術・防衛装備面における米国との協力に関しては、今回のモディ首相訪米がブレークスルーとなり得るのではないかと思います。

（平松）やはりインドとしても、取るものは取るということで、従来の米印関係では得られなかったものを具体的な成果として今回は得ることができたと考えら

れます。これも最初に申し上げた、インドに対する関心と重要性が諸外国で高まってきたことによって、インドの外交的レバレッジというものが上がって来ている一つの理由かと思います。

また、よく言われることでは、歴史的な経緯などからインドはロシアとの関係を非常に重視しており、今日におけるウクライナ戦争に関してもインドは独自の立場をとっています。西側諸国から見ればインドの対露姿勢に、どうしてこういう立場を取り続けているのか疑問に思う所があると思いますが、先生から、なぜインドがそのような立場を貫いているのか、少しわかりやすく解説してもらえますでしょうか？

（伊豆山）石油エネルギーのロシアからの供給、兵器装備などの提供、といった経済・安保的な結びつきが印露関係においては強いという点があります。さらに政治的なイデオロギーという側面でも、ロシアが２００年以降に追求し始めた、アメリカのユニラテラリズム（一国行動主義）への異議申し立てと多極世界の形成に共鳴しています。また、ＮＡＴＯの東方拡大がロシアを追い詰めたという「同盟に対する不信感」を示すナラティブに対して、自らの隣国パキスタンに西側同盟が出来た歴史的な背景などからも、ロシアが持つ秩序感のほうがしっくりくる、という側面があります。

さらに、インドとロシアの防衛装備に関する協力関係も我々が思っている以上に盤石です。インド海軍の対露装備依存度は３割程度になっては来ているものの、とりわけインド陸軍は装備面においてロシアと強固な関係にあります。特に戦闘機や主力戦車といった大規模攻撃兵器もロシアにかなり依存している一方、アメリカは大型輸送機や攻撃ヘリの提供にとどまっています。また、技術開示の側面や、制裁の行使という点においてインド側がアメリカに抱く不満・不信は強いと思われます。やはり、防衛装備技術という視点を取りますと、インドのロシアに対する信頼は、アメリカに対するそれよりも依然として高いのではないかと思います。なので、インドが米国に抱く不信感が今回のモディ首相訪米時の合意でどこまで払拭されるのか、という所が注目点ではないでしょうか。

（平松）長い歴史の中で、インドはロシアにかなり助けてもらったと感じているのでしょう。そして、台頭する中国を牽制する文脈においてもロシアとの関係を強化するという思惑も存在するのだと思います。そのことを踏まえると、ロシアとインドの密接な関係は今後も続いていくのではないかと思います。

（伊豆山）親米派と思われるインドの元外交官が「アメリカとの関係はたかだか２０年です。ロシアとの関係は１９５０年代からもう７０年以上も続いている関係なのです。」と発言していましたが、インドはまだまだロシアのことを信頼していると思います。

（平松）日本もやはり、このような印露関係のメカニズムをもう少し理解した方がいいのかもしれませんね。もう一つお伺いしたいのは、

インドも２０１７、２０１８年頃からＱＵＡＤメンバーに入り、日本が提唱している、自由で開かれたインド太平洋構想（ＦＯＩＰ）に対して、ある意味それに近い考え方を示し始めています。一方でインドが考えているインド太平洋構想と日本が考えているＦＯＩＰは必ずしも一致しない点もあるようにも思えますが、伊豆山先生はどう思われますか？

（伊豆山）南シナ海、東シナ海、インド洋などの海の安全、海洋安全保障に関しては、ＦＯＩＰとインドのインド太平洋地域政策はかなり近づいてきているのではないかと思います。南シナ海で共同航行を実施するなどの例からも、インドにおけるインド太平洋地域の海洋安全保障へのコミットメントは伺えます。

ただし、ユーラシア大陸におけるインドの大陸政策を考えると、やはり中国と戦争になったときに「米国は助けには来ない。インドを誰が助けてくれるのか。他の国からの核の傘の提供もない。」という安全保障上の不安が存在します。このような思考の存在が我々のＦＯＩＰとは異なる独自の行動をインドが取ることに繋がっているのではないかと思います。

（平松）ＱＵＡＤなどでの議論を重ねる中で、インドと日本、お互いのインド太平洋観というのが段々と収斂しつつあると感じるところがありますね。

最後にもう一つ、最近のインド外交において気になる点をお聞きしたいです。インドは基本として非同盟と中立の姿勢を貫いていますが、彼らが力をつけてインド周辺の地域に対して影響力を及ぼし、段々と力を伸ばしていくということを将来的に目指しているのでしょうか？インドはあくまでインド外交の伝統的な路線を継承し、色々な国々の利害に応じた形の外交を展開していくのか、あるいは中国のように周りの国々を徐々に自分の勢力圏に置いていくことを考え始めているのかが気になるところですが、どうでしょう？

（伊豆山）まずインドは中国のようにアサーティブ（自己主張が強硬）ではないと言われることが多いです。実際インドはＡＳＥＡＮ諸国に対してかなり気を遣った外交姿勢をとっています。独立直後は、宗主国イギリスと一線を画してＡＳＥＡＮ諸国に対して低姿勢かつ、気を遣って接していましたし、今日では「ＡＳＥＡＮ中心性」を尊重しています。

一方でインドは南アジア諸国に対してはかなり介入的な姿勢を保っています。特にネパールとバングラデシュに関しては、親インド的政権の存在を常に望んでいます。しかし近隣諸国第一政策の中で、スリランカに対しては中国の方に追いやらないために注意を払っていて、人権問題で追い詰めないように注意しています。

しかし、モディ首相がネパールやスリランカを訪れた際にヒンドゥー寺院や仏教寺院に立ち寄り、文化外交を展開していることは若干気になる傾向ではあります。

（平松）現在、モディ首相はヒンドゥー教を中心とした

国作りをやっておられるので、ヒンドゥー文化を周辺地域に広げていくということが、将来あり得るのか否かという点は、今後のインド外交を見る際に頭に入れておかなければならないと思っています。

今日は伊豆山先生、ありがとうございました。

（伊豆山）どうもありがとうございました。